

家事の意味について

乗本 秀樹

On the Meaning of Housework

Hideki NORIMOTO

1. 手段としての家事

i) 自然との格闘の果てに生活資材が調達され、その延長ないし勢いのなかで消費される。職住分離や専業主婦などによって特徴づけられる近代的な家族や家庭は形成されておらず、生活の場の内と外のしごとの質の違いも薄い。——生活の場がこのような傾向を強く帯びていた時代には、消費のためのしごとを引き受ける者にとって違和感のようなものは乏しかったのではないだろうか。これに対して、社会的な労働が明瞭に区分され、そこでの生産物を入手して利用するかたちが一般的になっている現在、生活の場での消費のためのしごとは格別の覚悟や達観を要するものになっているようである。

すなわち家事は、〈調達、保存、加工、維持・修繕、環境整備〉〈育児、教育、治療、介護、看護、交際〉〈学習、記録、診断、計画〉といったように、種類がきわめて多様である¹⁾。それぞれに、蓄えられた技術を必要とし、欲求・欲望にもとづく内外の環境への適応、周到な計画をふまえて決断し実行する投企、あるいは対象と主客一致の気持ちになりつつ没頭する持続といった人間らしい行為を伴う。しかしながら、一度でも家事に携われればわかるように、そして毎日携われればなお痛切に感じるように、家事は労が多い。繰り返しが多く、達成の目安があいまい、そして何かに拘束されている感が強いのである。その意味で家事は必要悪であり、「常に同じ円環に沿って動くのであり、その円環は生ある有機体の生物学的過程によって定められ、この有機体が死んだときはじめてその『労苦と困難』は終わる」、「絶えず、終りなき闘い…。自然的過程に逆らって世界を保護し保存することは、労苦の種で、このために、

単調な雑事を日々繰り返さなければならない…。情容赦なく反復しなければならない…」という労働の描写(H. アレント)に適う²⁾。

この労働を、社会や家庭で特定の人に背負わせてしまうことを避けようとするならば、原料生産から残滓物処理に至るまでについて完璧な集中管理システムが構築されなければならず、私たちは死ぬまで引き受けなければならない³⁾。このようにどうしようもない家事という労働を、私たちはどう引き受ければよいのだろうか。

容易に納得できる引き受けの動機ないし理由づけの一つは、家事を何かの手段と見たることである。「生きるために」欠かせない手段として、すなわち「健康であるために」「安全であるために」「快適であるために」「人に見劣りしないために」「自分らしく自立して生きるために」家事を位置づけ受け入れるのである。もう一つは、他者を持ち出すことである。「愛しい子供のために」「可愛がってくれた祖母のために」といったぐあいである。

家事を引き受けるに際してのこうした正当化について、ここでは是非を問う余地はない。しかし、それにしても、こうしていちおう納得できたうえで従事しているはずの家事のさなかにふと虚脱感や違和感を覚えてしまうのはなぜだろうか。このことについては、二つの点で議論が求められる。

その一つは、家事の社会性ということにかかわってである。家庭外で行なわれる労働と異なり、家事には対価が支払われず、比較的狭い人と人のむすびつきで展開されがちである。こうしたなかで、社会からの疎外感や孤立感を覚えがちなのである。

もう一つは、上述の繰り返しや被拘束性という特質にかかわる。すなわち、労働によっては「世

界」の「永続性と耐久性」が保証されないことへの不安、「触知できる物のうちで最も耐久性の低い物は、生命過程のものに必要とされる物である。…『人間の生命に本当に有益であり』、『生存の必要』に有益であるような『よい物』は、…最も世界性がな」いことへの根源的な不安である⁹⁾。と言っても、この不安は家事だけに固有ではなく、現代の労働一般が帯びるものである。むしろ問題なのは、『『生存の必要』は労働と消費の双方を支配している」ために、家事にはいわば二重の重みで不安が伴うことである⁹⁾。

以上の二つの論点のうちで、本稿でこだわってみたいのは後者である。すなわち、家事に携わるに際しての根源的な不安はどう乗り越えられるのだろうか。「～のために」ということとは別に、家事というしごと自体の意味を端的に感得し了解することはできないのだろうか。

ii) この点について考えてゆくための一つのはかりは、H. アレントの所説に見いだされる⁹⁾。

アレントは、「観照的な生活」と区別される「活動的な生活」を成り立たせる行為タイプとして、「労働 (labor)」のほかに「活動 (action)」と「仕事 (work)」を挙げる (正確には、いま一つ「思考」がある)。「活動」は、演劇や演説などのように、多数の人間の中に自身の正体を曝しつつ人間関係の網の目を構築するものであり、その結果を予言することはできないが後になって物語として語られ得る。「仕事」は、家具や芸術作品を製作する場合のように、人間の寿命を越えて耐久性のある世界を作り上げる行為であり、際限なく繰り返されるのではなく明確な始まりと明確な終りをもつ。そして、アイデアやイメージに先導され、かつこのアイデアやイメージは「仕事」の後にも残る。「労働」との対比で言えば、生命拘束的ではなく生命 (死) 超越的さえあること、家族という私的空間や社会という半私的空間ではなく公的空間での営みであること、「卓越 (excellency)」が期待されていることなどにおいて、二つの行為は共通する。

これらの非労働タイプの行為がてがかりになるのは、家事というしごとまたは「活動的な生活」について、問いの立て方を示唆してくれるからである。家事のうちに、網の目構築や物語創造の契機、あるいは耐久性のある世界やイメージを見いだすことができるのかどうか、もし見いだすことができるのであれば家事に従事することへの不安

が多少とも緩和されるのではないか、——こう考えさせてくれるからである。

繰り返すまでもなく、アレントの定義によれば家事は異義なく「労働」である。その労働のうち非労働的な契機をあえて見いだそうとするのは、あるいは生命拘束的な労働という行為のうちにあえて超生命的な契機を見いだそうとするのは、自家撞着かもしれない。しかし、アレント自身が三者をそれぞれまったく独立なものと考えているのではないこと、それどころか「労働」と「仕事」、「活動」と「仕事」の浸透関係に多大な関心を示しているのをうかがうとき、この懸念は多少とも拭かれるのではないだろうか。

2. 家事の端的な意味

家事という行為にそれ自体の意味を見いだすことが、可能かどうか。散見されるいくつかの家事観を吟味することによって、見当づけておこう。

(1) 格物致知・心身リズムとしての家事

i) 幸田文のいくつかの文章に接するとき、家事という行為がどこかしらきりりとして躍動を帯びたものに思えてくる。たんなる労働としての家事を超えた生気を感じ受けるのである。

もちろん、幸田文 (以下、文と呼ぶ) は冒頭に述べた家事の労を知っている。「家事をいやがったのは、決して戦後の若い人の専売ではなく、…私たち年代の女たちも、歓喜をもって家事のなかへ飛びこんで行ったものは一人もなかったのを思ひだすべきである。毎日ごはんを炊いて、掃除をして、洗濯をして、また翌日もさうやって、…つまらなくて、飽きて、しまひには腹が立つたおぼえがあるはずである。」と言ひ、「どんなにいやでも、家事は人間が生きるために生じて来る用事なのだから」と言う¹⁰⁾。また、家事へのそのような覚えの由来についても知っている。「女は家事をするものといふ観念と僅かばかりの実際上の技術」を除けば私たちが先立つ世代から譲り受けたものがあまりに乏しいこと、社会とのかかわりで家事を見ようとしなないことが根本的な問題だと言うのである¹⁰⁾。

にもかかわらず、文には家事への悲観がない。家事こそは趣味や特技の域を超えて自身の人格であり天地である、そんな風さえうかがわれる。このような家事への姿勢とまなざしは、文の実体験

そのものでもある。そして、その背景には、文自身も繰り返し述懐しているように、父である幸田露伴（以下、露伴と呼ぶ）による教育がある。

文がどのようにして家事の極意と達観の境地にたどりついたのか、露伴の家事観がどのような思想や感受性によっているのかなど気になることも多いが、家事への姿勢に焦点を絞ってあらましを見ておこう。

ii) 文の家事論に触れて気づくのは、家事作業に、一貫するスタイルのようなものが求められている点である。そのスタイルは教育と鍛練によって養われるものであり、内面のうらづけを伴う。掃除について言えば、「掃除の理念」「掃除神経」「掃除観」が尊重されるのである⁹⁾。そして、好ましいスタイルは、仕上がりのきれいさなどへの美感（観）や快感（観）もさることながら、身体の動き、とりわけ生き生きとしてリズムカルな強さを伴う。このことは、料理について頻繁に述べられる。

“商店から買う、散らかす、片付けるという一連のことこそ、料理法に先立つ技量の、分岐点かとおもう。料理のよく出来る人の作業を見てみると、ほんとに胸のすくように、散らかしたり片付けたり、自由自在でいきいきとしている。料理とは、こういういきいきとした忙しさを、含むものではあるまいか。”¹⁰⁾

“（私の台処友達には）てきぱきとした活気、ねちりした強さ、本能的な鋭さ、軽い楽しさがあつた。…かうして、食事は全くかつ積極的にとゝのへられる。…あの一種の精悍な働きぶり…”¹¹⁾

このような厳しい要求は、もちろん一般家庭での料理に対してである。「料理というものは、ふやけた気持ではだめなもの。このしっかりした態度はことに家庭料理では、身にしみておぼえるべきで“きびしくてとてもついて行けない”などと音をあげては甘ったれた。」というわけである¹²⁾。そうしたなかで家事空間である台所は、和気藹々や寛ぎの源泉である前に真剣なしごとの場であり、孤独をかこつことも辞さない場である。そして、たとえば「おいしい」ということも、合い言葉や味覚生理の問題ではなく、しごとの段取りや勢いまでも共有し合えてはじめて了解可能になるようである。

“台処はもとへたべものをこしらへるところだ。…野性的な場処だ。私の台処友達はそのこ

の作業を、いさゝか原始的に、野性的に、積極的にやつてゐるわけではなからうか…”¹³⁾

“台所は火水刃物のある仕事場で、寛ぐ部屋とはちがう。楽しさは料理をする手元から立ちのぼるもの、それでいいと私は思っています。”¹⁴⁾

“何度私はかうした台所のなかだけの極小の世界で、食べものの話のうまく行かなさを知らされたか。…今に至るもなほ、おいしいことをどうやったら、きく人に快く話せるだらうかとなげいてゐる。”¹⁵⁾

「料理をする手元から立ちのぼるもの、それでいい…」と言われる「軽い楽しさ」は、どういう性質のものなのだろうか。私たちが料理作りに期待したり経験する楽しさよりもつつましくかに見えるが、そうなのだろうか。このことについては、むしろ文が紹介する露伴の家事実演光景がてがかりになる。

すなわち、文において「野性的」とも表現されるいきいきとした勢いは、露伴においてはリズムそのものである。

“右手に箸の首を掴み、左の掌にとんへと当てて見せて、かうしろと云われた。…房のさきは的確に障子の棧に触れて、軽快なりズミカルな音をたてた。何十年も前にしたであらう習練は、さすがであつた。技法と道理の正しさは、まっ直に心に通じる大道であつた。かなはなかつた。”¹⁶⁾

“父の雑巾がけはすつきりしてゐた。のちに芝居を見るやうになつてから、あのときの父の動作の印象は舞台の人のとりなりと似てゐたのだと思ひ…。白い指はやゝ短く、づんぐりしてゐたが、鮮やかな神経が漲つてゐる、すこしも畳の縁に触れること無しに細い戸道障子道をすうつと走つて、柱に届く紙一重の手前をぐつと止る。その力は、硬い爪の下に薄くねなるの血の流れを見せる。規則正しく前後に移行して行く運動にはリズムがあつて整然としてゐる、ひらいて突いた膝ときちんとあはせて起てた踵は上半身を自由にし、ふとつた胴体の癖に軽快なこなしてあつた。”¹⁷⁾

このリズムは、習練を通して形成された身体的なものであるが、たんなる技の上手に尽きない。理詰めで合理的に処すことを自覚し続けるなかで培われたものである。

“父は…朝晩の掃除はいふまでもないこと、米

とき・洗濯・火焚き、何でもやらされ、いかにして能率を上げるかを工夫したと云つてゐる。格物致知はその生涯を通じて云ひ通したところである。”¹⁸⁾

“この雑巾がけて私はもう一ツ意外な指摘を受けて、深く感じたことがある。それは無意識の動作である。雑巾を搾る、搾つたその手をいかに扱ふか、…私は全然意識なくやつてゐた。『偉大なる水に対して無意識などといふ時間があつていゝものか、気がつかなくつたなどはあきれかへつた料簡かただ』と痛撃された。”¹⁹⁾

そして、リズムの習練と致知の対象は、不可欠ではあるが露伴や文（ひいては世間の人々）にとって必ずしも絶対的な値うちが与えられない家事作業である。その家事に「渾身」と「執念」と「徹底」をもってあたることを大切と考えていたのである。

“家事に追はれるといふのは何と惨めなことで、家事はこちらが先手になつて追ひまくるべきものだと云ふ。自分を豊かにし楽しくするために女はもつと勉強しなくてはいけない。能力と労力を挙げて本気に家事を処理すれば、勉強の時間は恐らく必ず得られる。…つまり家事などは片手間にやつてしまへるやうでなくてはならない、といふのであつた。”²⁰⁾

「片手間にやつてしまへる」家事に、そのつどに「能力と労力を挙げて本気に」携わる。本気に携わっていることさえ忘れて、本気で携わる。

“努力して居る、若くは努力せんとして居る、といふことを忘れて居て、そして我が為せることがおのづからなる努力であつて欲しい。さう有つたらそれは努力の真諦であり、醍醐味である。”²¹⁾

この「醍醐味」こそが、「料理をする手元から立ちのぼる」「軽い楽しみ」なのではあるまいか。その意味で、この楽しみはけっしてつつまじやかで狭隘な楽しみではない。後述する演技する人間の感懐にも類する楽しみなのではないだろうか。

(2) 演技・芸術としての家事

i) 山崎正和は、産業社会と言われる時代には「個人の生涯」という時間の観念、「生涯を通じて単一の役割りに埋没することを拒否しようとする」態度、あるいは「かけがへのないただひとり的人格として…他人の注目と気配りを要求」する態度

が欠けていたことを反省する²²⁾。そのうえで、脱産業社会と言われる時代における人々の生き方を展望する。そして、生産に傾倒する生き方よりも、消費を重視しこれを積極的に楽しもうとする生き方のうちに、新しい個人のありようと社交や地域社会のありようを見いだす。

もちろん、そこでの「消費」は「巨大社会の流行に操作され、行動としての自由と自発性を禁じられた行動だといふ無力感」を帯びる受け身の消費ではない²³⁾。また、そこでの個人は「荒野に孤独を守る存在でもなく、強く自己の同一性に固執するもの」でもない²⁴⁾。「多様な人間に触れながら、多様化して行く自己を統一する能力」「演じられたいいくつかの役の背後で、つねに静かに醒めてゐる俳優の心の同一性」である²⁵⁾。以下では、消費の概念を中心に紹介しておこう²⁶⁾。

ii) 山崎は、消費の過程を支え導く欲望を三タイプにおいてとらえる。「ただ目の欲望対象に心を奪はれ」ている状態、「満足を先送りする欲望」ならびに「満足を引きのばす欲望」である。ガツガツと餌に食らいつくような欲望状態を意味する前者は「自我以前の自我」であり、ここでは論外である。この状態を越えたときに、後二者の欲望が意味をもつ。「道はただちに二筋に分かれる」のである。

一つは、「満足を先送りする欲望」に導かれる場合である。読書を例にとれば、「理論的に推理小説の筋の展開の法則性を研究」したり「知識を増やす目的（を）より効率的に実現」しようとする場合である。あるいは料理で言えば、「対象を『美味』に限定して、それを最短時間に作り出さうとする」場合である。生産とも呼べるこの過程で、自我（「硬い自我」）が形成される。「自己の欲望を限定して対象化したとたん、人間は自分自身を振り返って意識したことになる」からである。生産する自我は、「自分を一定の技術を持つ人間として形成する」からであり、「自分を一箇の効率的な道具として自由に使へる存在に変える」からである。

いま一つは、「満足を引きのばす欲望」に導かれる場合である。『犯人は誰か』といふ興味に身を焼きながら、むしろそれゆゑに自分自身の欲望をじらしながら、あへて構成や文体や細部の趣向を楽しむ」読書、「時間の経過におかまひなく、しかも食物の美味とも手仕事の快樂ともつかず、対象として明確に限定できない満足を作り出さう

とする。…手や足を動かし五感を働かせ、行動の過程から最大量の反作用を受け」る料理がそれである。ここでは、「もの」の消耗といふ目的は、むしろ、消耗の過程を楽しむための手段の地位に置かれ」ている。

「人間はすべての消費を生産の姿勢で営むこともでき、あらゆる生産を消費の姿勢で行なふこともできる」が、尊重されてよいのは「満足を引きのばす欲望」に導かれるものであり、これこそが厳密な意味での消費である。この消費は、次のような特徴を持つ。

第一は、演技の特質を備えることである。「行動の目的を括弧に入れて、その過程の全体を意識の中心に据えて行なふ行動」であり、「もの」の消耗と再生をその仮りの目的としながら、じつは、充実した時間の消耗こそを真の目的とする行動」だからである。

第二は、演技であればこそ、共生の契機があることである。それは、以下のような必然性による。

“消費といふ行為にかかはるかぎり、彼の自我は本質的に他人をうちに含んで成立するものであり、しかも他人との調和的な関係を含んで成立するものだ…。消費する自我がかうした構造を持つものだとすれば、やがて、それが消費の場所において現実の他人を必要とし、その他人による賛同を求めることになる…”

“少なくとも欲望の満足にかかはるかぎり、自我は最初から他人と共存し、その賛同を得てはじめて自分自身を知りうる存在だ…”

“満足を引きのばすこと（は）…ものを消費する行動に様式的な折目をあたへ、趣味的な遊びを加へるかたちで行なはれるが、そのこと自体、ひとりで行なふのはけって簡単な仕事ではない。…安定したいいきいきしたリズムを失ってしまふ。”

第三は、身体的な行動だということである。「消費は本質的に身体的な行動…スタイルをもつ」そして、「スタイルは、意識がそれを完全に支配し、能動的に操ってゐるやうに見えるときには破綻を招くものであり、逆に半ばそれに乗せられ、受動的に運ばれてゐるやうに見えるときに効果を発揮する」のである。

以上のように、山崎の見解の特徴は、欲望の満足に駆られるにせよ生存の必要に迫られるにせよとどのつまりは「費消」と見られてしまいがちな消費を、芸術にも似た行為としてとらえる点にあ

る。もちろんここに、家事そのものについての具体的な言及は必ずしも多くない。しかし、「すべての消費を生産の姿勢で営むこともでき、あらゆる生産を消費の姿勢で行なふこともできる」という指摘から判断して、また料理という具体例が援用されていることから察して、家事というしごとについても演技的協働や美的芸術を志向する実存のありようを問い、観ることができよう²⁷⁾。

(3) 神的宇宙の創造と家事

i) フェミニストたちの多くは、家庭や家事を否定的に見てきた。だが、その家庭や家事の中にも積極的に汲み取ってよい意味があるのではないか。その意味を肯定的に受けとめることによって、男性ないし男性中心主義の感じ方や考え方に影響されない「女性という姿での完全な人間 (full human beings in female form)」を誕生させるのではないか。また、社会のシステムを再編成することもできるのではないか。

このような考え方に立つフェミニズム論者も、幾人かいる²⁸⁾。ここでは、そのうちの一人であり、家政や小農こそはポスト産業時代の現代にはほとんど失われてしまっている「知識の様式 (a mode of knowledge)」の恩恵を受けることができるという、K. A. ラブツィに注目しよう。そして、自身の家事経験にも依りつつ深められてきた「神学」的思考を、かいま見ておこう²⁹⁾。

ii) ラブツィは、これまで安全さや整然さの達成という目的のみむすびつけられてきたために、家事作業の「動き (movement)」にほとんど関心が払われなかったことを反省する。そして、あらためて動きに着目するとき、そこには聖なる世界創造の過程が見えてくると言う。

“自身の外的な似姿としての家にかかわるかぎりにおいて、主婦は、自分のための空間や世界を作っている。同時にまた、(家事作業を)上演することによって、彼女自身が自分と他の人々のための世界になるように、身体の内部を拡大している。”

つまり、主婦は日々に、作業のつどに世界を創造している。彼女の動きは、自分の身体の拡大版になるように世界を創造しており、それは、ダンサーが＜身体の延長として空間を感じ—空間を身体に感じ受けつ—空間を更新してゆくものにも似ている。小さな置物のほこりを払ったり衣服にアイロンをかける作業に身体の「拡大」という形容

はなじまないかもしれないが、自身が内面に抱くかたちを対象に写し付けることによって世界を創造しているのである。このように、あらゆるメンテナンス作業は宇宙の秩序づけであるが、突如ゴキブリや泥棒が現れたり雨が漏るようなときには混沌に陥る。あるいは、秩序づけが過剰になると、家という空間はデモニックになってしまう。

家族の世話、とくに食事の世話はどうだろう。

このしごとは給餌とも言えないではない過程であり、テレビ料理の受け売りやファーストフードに頼るかぎりでは、この俗の次元を超えることはできない。しかし、情熱をもって献立を考えるようなときには、主婦は「聖の領域 (the sacred realm of great goddesses)」に入る。この領域は「豊かさ (abundance)」そのものであり、そこでの主婦のイメージは「すべてを給してくれる強さと自足の母 (all-providing mother ; her own strength and self-sufficiency)」である。

そして、食事作りという創造には、破壊が続く。食べるという行為は破壊だからである。その意味では、主婦の食事作りと食物は、芸術家とくにモダン・アーティストたちの行動や作品の運命とも似通う。それどころか、記号論風に言えば、食事は「母の消費」である。食事提供のための母の努力、その努力の結果を食する。つまり母を食べるのであり、これは授乳さらには聖体拝領の儀式にも比される。こうして主婦は、家庭 (home) という空間の創造主であり巫女なのである。

また、主婦の伝統的な存在様式は「待つこと (waiting)」(家族の帰りを待つ、煮えるのを待つ、乾くのを待つ、など) に端的である。近代において、「待つ」ことはいつも悪としてとらえられてきたが、これは西欧文明を支配している直線的で歴史的な時間感覚すなわち男性の時間経験に従っているからであり、そこから脱却して循環的・神秘的な女性の時間経験を肯定することが大切である。「待つ」ことは、「根ざす」ということをも意味しており、成長にとって肝要な条件なのであるから。

このような時間経験が受容され、いかなる目的からも解放されて「待つこと」自体に意味があることが了解される時、主婦は新たな「物語 (story)」の可能性に気づくはずである。ただし、男性の感受性や思想や言語が支配的なところでむりやり「待つこと」を表現し叙述しようとする、大切なものが損なわれてゆく。むしろそれは、

「このかたちは何を意味するか」などという記号解釈と無縁のところ、色・かたち・線・平面・繊維などの現実の物を直覚するなかで生み出される。その意味で、言語を用いて直線的・歴史的な時間経験のなかで編まれる通常の物語とは異なり、ミニマル・アートにも似ている。

3. 労働を超える家事

i) 生きてゆくのに必要なこと (幸田文・露伴)、引きのばされる満足 (山崎正和)、掃除したり食事を作ったり待つこと (K. A. ラブッツィ) をめぐる上の議論は、いずれも私的で生命拘束的な世界に関する議論である。興味深いことに、共通して持続 (H. ベルグソン) の姿勢が尊重されており、このように「生の哲学」が基底に置かれること自体が、アレントに言わせれば生命拘束的であることの証である。こうした意味で、前節で紹介したものは「労働としての家事」に関する見解である。

しかしながら、上の素描からは、労働に還元しきれない印象をも受ける。三者はいずれも何らかの程度に演技性を強調しているが、このことにかぎらず、アレントの「仕事」や「活動」になぞらえられる特質がそれぞれに感じ受けられるのである。

すなわち、幸田の家事像は、いかに能率よく行なうかを理詰めで考え訓練しリズムカルな動きをもって実践すること、実践の自覚を忘れていくかのように実践することである。能率への配慮ということには満足を送りながら生産の姿勢で臨む「技術的人間」(山崎)の様相が、あるいはリズムカルな動きや実践には「肉体と道具が同一の反復運動の中で回転するようになった労働 (アレント) の様相が、たしかにうかがわれる。しかしながら、それ以上にきわだつのは、生きてゆくための必要やおいしいものを食べる欲望満足から昇華され相対化されることによって堅持されている「家事遂行のイメージ」である。

しごとを運ぶかたちをめぐるこのイメージは、生産物の形質をめぐるアイデアとは異なるが、家事という行為に先立ってあり行為の後にもあり続ける。そして、道路や建築物や芸術作品のように触知可能なありようにおいてではないが、私たちの世界を維持する役割を背負っている。その意味で、幸田の家事像は「仕事」の成分を含む³⁰⁾。

山崎において、演技的な消費行為は自己を発見する過程である。自己の内において「満足を急ぐ欲望」と「満足を引きのばす欲望」が、あるいは内なる自己と内なる他者がたがいがかり合ななかで、全体としての自己（個人）があきらかにされてゆく。そうした構造に支えられる個人どうしが消費を介してかかわり合ななかで、人々はより深く自分を知る。こうしたなりゆきは、もちろん公的空間で他人たちに自身を曝すこととは異なる。しかし、個人（自己）を構成するいわばサブ自己たち（満足を急ぐ欲望、満足を引きのばす欲望；内なる自己、内なる他者）が自身を他のサブ自己に曝す、あるいは社交という半私的な場で個人どうしが曝し合う、というふうに類推できないだろうか。そのかぎりでは、ここには「活動」の特質を見いだすことができる。

ラブツィにおいては、物語が注目される。もちろん、卓越した政治活動などを言語で綴る物語ではない。しかし、家事の作業や空間が世界ととらえられ、そこに聖書とも対峙しうる物語を読み出してみる、——ラブツィの著作自体がその試みである。そして、家事の担い手の一人一人が物語を創造ことができると言う。ここにも、「仕事」としての特質が見いだされるのではないか。

具体的な個人が、不死を願い、卓越をめざし、公的世界に自身を曝し、物語を編む。これがアレントの言う「活動」であり「仕事」であり、人間が生き営むための広くかつ永続する世界を構築する行為である。これに対して、前節の三者にうかがわれるのは、私的空間または個人の内面という世界で、普遍を願ったり、卓越をめざしたり、自己をほぐし組み立てたり、物語を創造しようとする営みである。個人がアイデンティティを発見しようとする営みと言ってもよいであろう。そうであるかぎりでは、家事は必要悪であり労働だと、性急に断言されてはならないのではないか。

ii) 家事の意味をめぐる以上の考察は、三つの意味で試論にとどまる。

第一は、「労働」を「仕事」「活動」と対置するアレントの所説を議論の尺度にしたことにかかわる。生活の場を維持し展開してゆく営みである家事の行為を、＜究極的には欲求充足に資する労働＞、あるいは＜物質（生命）循環の一過程としての労働＞という理解によってとらえきれるものかどうか。もしそうだとすれば、生活世界を築き支える能動的な動因のいくつかが捨象されてしま

うのではないか。アレントのラディカルな所説に依拠してみたのは、家事というしごとについて考えてゆくに際してこうした手落ちを防ぐために、考え方の別軸を模索しようとしたことでもあった。とはいえ、ラディカルであるだけに、壮大で骨太なこの議論枠組みによって、現代の家事についてどれほどに精細な観察や提案ができるか。別途に検討を要することがらである³¹⁾。

第二は、家事というしごとの内容にかかわる。冒頭に例示したように、雑多とも言えるほどに多彩な内容を含むのが家事であり、そのうちには質を異にするしごとも多い。たとえば、掃除と室内装飾と食事準備と育児とでは、それぞれに心身のはたらきや「労働」「活動」「仕事」の傾性が異なる。その意味では、「家事」と包括してしまった料理や掃除だけに視野を限るのでは不十分である。ラブツィが試みているように、細かくかつバランスのとれた考察が求められよう。

そして第三は、任意に取り上げた三つの家事観例では不十分だということである。折りしも、家事というしごとの質を直接間接に問う議論があちこちで展開され始めており、それらのうちには家事の端的な意味に触れるものも見られる³²⁾。そうした議論からも裨益されながら考察してゆくことが、大切であろう。

[注]

- 1) 大森和子ほか『家事労働』（光生館、1981年）における分類を参照した。
- 2) H. アレント『人間の条件』（志水速雄訳、筑摩書房、1994年）、154～156頁。なお、前者の括弧内については食事準備などを、後者の括弧内については掃除などを思い浮かべるとよい。
- 3) 柏木博『家事の政治学』（青土社、1995年）によると、家政学草創時代のアメリカで、集中管理の方向で共同家事が構想されたこともあるという。
- 4) 前掲アレント『人間の条件』、151頁。
- 5) 同上、155頁。
- 6) 以下での引用は、前掲アレント『人間の条件』による。
- 7) 幸田文「三島祐利・三島せい子著『家事と雑用』（『幸田文全集・第3巻』：初出は1953年；『全集』は岩波書店刊、1994～1996年）、253頁。
- 8) 同上。

- 9) 同「掃除」(『全集・第4巻』；初出は1954年)、299～300頁。
- 10) 同「テレビ料理に願う」(『全集・第12巻』；初出は1961年)、265頁。
- 11) 同「台所雑感」(『全集・第4巻』；初出は1954年)、304～306頁。
- 12) 同「料理は人なり」(『全集・第18巻』；初出は1969年)、373頁。
- 13) 前掲「台所雑感」、306頁。
- 14) 幸田文「ごさいません(台所育ち)」(『全集・第20巻』；初出は1974年)、123頁。
- 15) 同「食べるものを話す」(『全集・第9巻』；初出は1958年)、318～319頁。
- 16) 同「こんなこと(あとみよそわか)」(『全集・第1巻』；初出は1948年)、115～117頁。
- 17) 同「こんなこと(水)」(『全集・第1巻』；初出は1948年)、125～126頁。
- 18) 前掲「こんなこと(あとみよそわか)」、113頁。
- 19) 前掲「こんなこと(水)」、127頁。
- 20) 幸田文「こんなこと(正月記)」(『全集・第1巻』；初出は1949年)、203頁。
- 21) 幸田露伴『努力論』(岩波書店、1991年；初出は1912年)、5頁。
- 22) 山崎正和『柔らかな個人主義の誕生』(中央公論社、1984年)、37、55頁。
- 23) 同上、111頁。
- 24) 同上、127頁。
- 25) 同上、127頁。
- 26) 以下での引用は、前掲山崎『柔らかな個人主義の誕生』による。なお、これを補うものとして、同『演技する精神』(中央公論社、1983年)がある。
- 27) 家事を苦役に追い込みかねない伝統的(=近代的)な家事担当様式や、男女共生理念を杓子定規に受け入れてこわばった家事分担様式などを超えるかたちが、展望できるのではないか。また、日常の家事が「先送りされる欲望」に導かれる「生産」的家事であることは、やむをえない。そのような家事も、家族が織り成す演技的家事空間に取り入れられるならば、脱「生産」化されることがあるのではないか。
- 28) ジョゼフィン・ドノヴァン『フェミニストの理論』(小池和子訳、勁草書房、1987年)を参照のこと。
- 29) Kathryn Allen Rabuzzi “The Sacred and

The Feminine——toward a theory of housework——”、The Seabury Press、1982年。なお、以下での引用は同書の抄訳による。

- 30) さらに深読みするならば、芸道や武道などの「道」や「気」の宇宙に通じる何かが予感される。
- 31) しごとの特質を考察するに際してしばしばアレントの行為類型論が援用されるが、多くは、しごとに含まれる非労働部分を指摘するためのだてにとどまる。たとえば、鷺田清一『だれのための仕事』(岩波書店、1996年)を見よ。
- 32) たとえば、「やってみると家事は楽しいのだ。たとえていうと、家事には農業のようなところがある。」という広岡守穂『男だって子育て』(岩波書店、1991年)などは、興味深い。